（様式５）　　令和３年度　教職大学院派遣研修　研究報告書

派遣者番号	Ｒ３Ｋ１６	氏　名	福岡　聡子
研究主題 ー副主題ー	小学校家庭科教育における教科等横断的な学びについて ー学びの深まりと広がりを目指してー		
派遣先	東京学芸大学　教職大学院	担当教官	倉持　清美
所属	調布市立上ノ原小学校	所属長	寺本　喜和

キーワード：小学校　家庭科　教科等横断　合科的な指導　関連的な指導

１　研究の背景（目的）・主題設定の理由等

小学校学習指導要領（平成29年７月告示）では、教科等横断的な視点に立った教育課程の編成、資質・能力の育成、教育改善が求められている。教科等横断的な学びについては、「これからの時代に求められる資質・能力を育むためには、各教科等の学習とともに、教科等横断的な視点に立った学習が重要であり、各教科等における学習の充実はもとより、教科等間のつながりを捉えた学習を進める必要がある。」（中央教育審議会、2016）とされている。家庭科においても教科等横断的な学びは求められており、現行の小学校学習指導要領解説家庭編（平成29年７月告示）（以下、「家庭編」。なお、他の教科等の学習指導要領解説も同様とする。）では、国語科、理科、社会科、体育科の記載がみられ、他の教科の解説では、図画工作編、体育編に家庭科の記載がみられる。また、家庭編の中には「Ｂ食生活」の領域で、理科の第５学年における学習内容を示し家庭科で扱うことを具体的に記述している部分もある。（黒光・西尾、2019）学習指導要領のこうした記述は、教員にとって教科等横断的な学びを実施する手掛かりとなる。一方で、理科編には、家庭科の記載はない。教科等横断的に学べる機会があると示されても、双方の教科に記載がなければ授業時間数や指導時期の面で、実際の指導は難しくなるのではないだろうか。

また、各教科等の教科等横断的な学びに対する資料等は提示されておらず、詳細が現場に委ねられている状況は、従来から教科等横断的な学びが求められてきた総合的な学習の時間の現状を想起させる。総合的な学習の時間では、学校間のばらつきがある（文部科学省、平成22年）ことが指摘されており、同様の課題を抱えることが懸念される。そのため、各教科等における教科等横断的な学びを実践していくに当たっては、理念だけではなく具体的な授業実践についても検討していく必要がある。

そこで本研究では、教科等横断的な学びそのものについて具体的に考察し、その実態や意義、課題を把握する。そして、教科等横断的な学びを通して家庭科の学びをより深め、広げるために目指す家庭科の授業の在り方について検討する。また本研究では、家庭科の学びを深めることは、学習者が、既習事項を実生活に結び付けて、考えたり実践したりすることで、より良い生活を築こうとする姿を指すこととする。

２　研究の方法

研究１として、家庭編と家庭科の教科書（令和２年発行）から、教科等横断的な学びについての記載を調査する。

研究２では、都内公立小学校家庭科担当教員に質問紙調査を行い、「家庭科における教科等横断的な学び」についての実態を調査し、実践例と課題について分析する。

そして研究３では、筆者の過去の実践の中から抽出した合科的な指導と関連的な指導の授業を検証、分析し、成果と課題を整理する。

３　研究の結果

(1) 研究１について

家庭編に記載されている教科等横断的な学びを示唆する言葉や記述として、出現件数の多い順に「他教科」「行事」「総合的な学習の時間」「道徳」「理科」「体育」「横断的」「社会科」「特別活動」「国語」が見られた。しかし、これらの記述は双方の教科等に見られるわけではなく、実際に指導することを考えると、双方の教科等に記述があることが望ましい。ただし、「消費生活」のように家庭編と社会編双方に共通して頻出する言葉がある。これらを足掛かりにして教科等横断的な学びを行うことは可能であろう。今後は各教科等の目標と内容の構造化や横断的に学ぶことのできる教科や単元を整理し、分かりやすく示すことが必要である。

さらに、現在出版されている小学校家庭科の教科書２冊における、教科等横断的な学びを示唆する記述を調査、分析した。その結果、領域は食生活及び住生活の領域、学年は第３学年から第５学年、教科は社会科、理科、体育科に関する記述が多く見られた。また、家庭科専科として授業してきた筆者の実践経験と、他教科の教科書を参照した結果、教科書で指摘されていない教科とも横断できる可能性も見出せた。このことから、実践を積み重ねていくことで家庭科における教科等横断的な学びの可能性は更に広がると考えられる。例として、「Ｃ消費生活・環境」の家庭科と社会科（３年「地域に見られる販売の仕事」と５年「食料生産」）の教科等横断的な学びを取り上げたが、

各教科等で扱う内容の他、双方の教科に共通するとみられる内容は10項目あった。（図１）

このように、教科等横断的な学びを行うときには各教科等で学ぶ内容と共通する部分があり、共

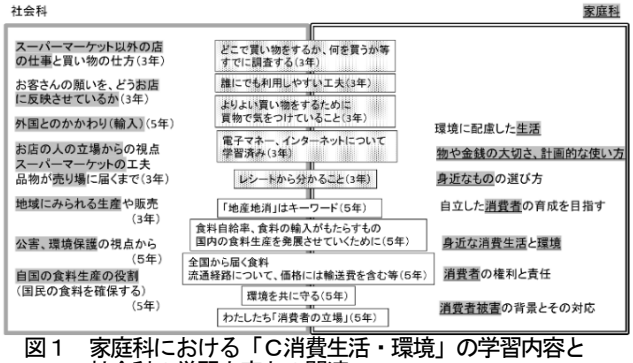

図１　家庭科における「C消費生活・環境」の学習内容と社会科の学習内容との関連

通事項については各教科等の視点に立って学ぶことができる。多角的に捉えることで学習内容に新たな知見が加わり、それは学びを広げることや深めることにつながる。これが各教科等で学ぶ意味や教科等横断的に学ぶ意義になると考えられる。

⑵ 研究２について

都内公立小学校家庭科担当教員を対象とする質問紙調査を行い、IBM SPSS Statistics27で分析した。（有効回答数77、回収率21.5%）その結果、教科等横断的な学びに対する教員の意識は高く、意識する理由には「学習意欲の向上」「学びの深まり」「学習指導要領の改訂」を挙げる教員が多かった。多くの教員が教科等横断的な学びに意義を感じている一方で、「時間がない」「どの教科や単元と横断的に学べるか分からない」ことから実践に結び付きにくい現状も伺えた。これらのことに配慮した工夫が必要である。また現場での実践例を、総則編に記載の合科的な指導と関連的な指導に照らし合わせたところ、家庭科における教科等横断的な実践例を三つのパターンに分けることができた。（図２）

この場合、合科的な指導は各教科等の学びを深

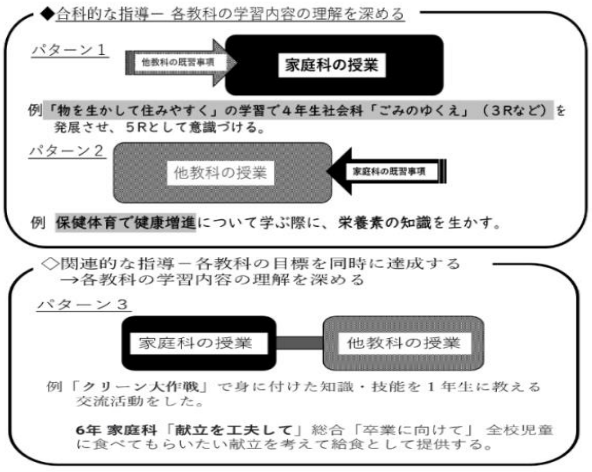

図２　家庭科における教科等横断的な学びの授業パターン（実態調査の回答の実践例から）

めるもので、主となる教科等が家庭科か他教科かで二つのパターンがある。そして、もう一つのパターンである関連的な指導の授業は、各教科等それぞれの時間に行うが、共通のテーマを扱い、各々の教科等の目標達成と理解を深めることの相乗効果を狙った学習だと考えられた。

⑶ 研究３について

研究３は、筆者の過去の実践を、研究１、２の結果をふまえて検証した。第一の実践は、家庭科の買い物の授業に社会科の食料生産の既習事項を結び付けた、合科的な指導である。この実践の成果は、児童の発言に社会科の既習事項が見られたことから、それらを筆者が意図的に取り上げたことにより、商品選択の際に社会科の知識を生かす児童が多く見られたことである。中には、「家庭科と社会科両方で学んだことを実際の買い物に生かしたい」と振り返りに記述する児童もいて、この姿は家庭科の学びの深まりに通じるのではないかと考えた。第二の実践は、家庭科と英語科及び家庭科と給食の関連的な指導の実践である。この実践では、児童の学習意欲の向上は双方に見られたものの、一食分の献立を英語でスピーチすることで家庭科の学びは深まったかという点について疑問が残った。家庭科を英語科と横断的に学ぶ意義や良さを筆者がもう少し理解し、活動を工夫して設定する必要があった。

４　研究の考察

本研究を通して、教科等横断的な学びにおいては児童が学びを深めたり、広げたりするために重要であることが分かった。そのためには、教師の役割として次のことが挙げられる。「教科等横断的な学びを通して、学習者が何を学ぶのか、教科等の目標と内容を把握し、適切な指導方法を選択すること」「学習者が双方の学びを結び付けられるようにガイドすること」「学習対象が日常生活である家庭科の教科の特徴を生かして、家庭科が他教科と日常生活を結び付けられることも視野に入れて指導すること」その際には、「家庭科の学びが深まっているかの視点をもつこと」である。

５　今後の展望

教科等横断的な学びは、既習事項を確認したり利用したりするだけでなく、児童が学びを深めたり広げたりすることを目指して行われることが重要である。先述の通り、学習指導要領や教科書での教科等横断的な学びの記述は、実際に授業を行う手掛かりとして十分だとは言い切れないが、その分、現場の教員が実践を積み重ねていくことで新たな教科等横断的な学びの可能性を広げていくことができるともいえる。

筆者も現場の教員として、家庭科の特徴を生かし、他教員と連携しながら教科等横断的な学びが双方の学びを充実させるための手段となるように、実践を重ねていきたい。